

## 中原中也の「J」

福島健太郎

中原との出会いは、中学の国語の教科書で読んだ「二つのメルヘン」である。大変美しい詩で、何度も復唱したものだが、その表現に、何かしら危なっかしさを感じた。危なっかしい魂とでも言おうか。私は、彼の詩集を買って、貪り読んだ。そして、私の感じた所が、そう見当違いでもなかった事を確かめると、「二つのメルヘン」は、大変物悲しい作品だと感じられた。彼の詩は、私の心を散々掻きまわったのである。「港市の秋」に、「J」書いている。

港の市の秋の日は、

大人しい発狂

私はその日人生に、

椅子を失くした

ある日、人生に椅子を失くした彼は、二度と椅子を見つけることが出来なかった。私は、彼の哀しみと気持ちを同じくしているつもりでいたが、自分の椅子を失くした者が、私の椅子になるはずもなかったのである。

あはれわが若き日を燃えし希望の  
今ははや暗き空へと消え行きぬ

以来、彼は、血を吐くようなせつなさかなしさを抱いて、「雨上りの曇った空の下の鉄橋のやうに」生きなければならなかった。それは、倦怠との情死と言える。彼の前途は「ボーヨー、ボーヨー」であった。

ひよつとしたなら昔から

おれの手を負へたのはこの怠惰だけだったかもしれぬ

真面目な希望も、その怠惰の中から

憧憬したのにすぎなかつたかもしれぬ

彼は、自分の本性を確かめたに違いない。自分は生来の詩人であり、それ以外の何者でもないということ。『在りし日の歌』の後記に、彼は「こう書いていい」。

たゞ私は、私の個性が詩に最も適することを、確実に確めた日から詩を本職としたのであつたことだけを、ともかくも云つておきたい

私には、大変悲しい自覚のように思える。彼の頭上に降る雪は、幼年時には「真綿」のようであり、少年時には「霰」のようであり、青年時には、「霰」になり、「雹」になり、ひどい「吹雪」となった後、「いとしいめやかなもの」になったのである。彼は生き急いだ。絶えず、何かを求め続けた。何か物足りなさを感じていたのだが、求める何かの正体は掴めなかった。

「いのちの声」に、

否何れとさへそれはいふことの出来ぬもの！

手短かに、時に説明したくなるとはいふものの、  
説明なぞ出来ぬもので「そあれ、我が生は生くるに  
値ひするものと信ずる

最後に、

ゆふがた、空の下で、身一点に感じられれば、万事  
に於て文句はないのだ

これは、「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」  
という、論語にある言葉に似ている。彼は、求道的な  
詩人であった。真の詩人とはみなそうしたものであ  
ろう。彼は、自分の魂が渴いていくのを感じていた。  
想いは過去へと遡る。

私は希望を唇に噛みつぶして

私はギロギロする目で諦めてゐた

噫、生きてゐた、私は生きてゐた！

人は人生に蹴躓くと、過去を美化したがるものだ。彼の精神は徐々に衰弱していく。或いは、急速に。

生きてゐるのは喜びなのか

生きてゐるのは悲しみなのか

こんな思ひが浮かぶといふのも

たゞたゞ衰弱つてゐるせみだろうか？

それとももともとこれしきなのが

人生といふものなのだろうか？

嘗ては純粹であつた彼の瞳も、年を重ねる毎に、次第に土色に変色した悲しみを湛える。彼は、悲しみのどん詰まりまで歩いた。

汚れつちまつた悲しみに

いたいたしくも怖気づき

汚れつちまつた悲しみに

なすところもなく日は暮れる

汚れつちまつた悲しみとは何か。だが、説明は要しない。誰にでも身に覚えがあるであろうから。孰れ、中原について詳しく書いてみたい。私が唯一愛読した詩人だからだ。しかし、彼の詩を読み続けることに、私の心が堪え得るかどうか。彼に別れを告げる日は、一体、いつになるであろうか。

おまへはもう静かな部屋に帰るがよい  
煥発する都会の夜々の燈火を後に、

おまへはもう、郊外の道を辿るがよい  
そして心の眩きを、ゆつくりと聴くがよい

了